慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	世界史における日本(G・B・サンソム著, 大窪愿二譯)
Sub Title	
Author	會田, 倉吉(Aida, Kurakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1952
Jtitle	史学 Vol.25, No.4 (1952. 9) ,p.104(537)- 107(540)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19520900-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書　評

河内石川村學術調査報告

近世村落資料（野村豐編　大阪府南河内郡石川村役場發行）

わが國寒天の歴史地理學的研究の權威者として知られ、これに關する多數の著編ある編者は、其の故郷であり永住の地である石川村についても亦既に古墳時代の調査研究を發表されたが、近年「我が國に於ける村落の研究」の一部として、この石川村の變遷を歴史地理學より考察を試み、今次、村内の舊家古寺等にて採訪の先人未見の古文書古記錄等を整理し、この中約五百點を一括上梓せられた。

石川村は大阪市の東南約七里、人口二五〇〇、戸數五〇〇、東には高い金剛山脈、西には低い河南丘陵があり、其の間を北流する石川の溪谷の略ぼ中央部、石川と其の支流に挾まれる臺地の尖端部に位する古代からなる由緒ある農村である。戰後の社會變動に禍されて各地の村落に父祖の殘した古文書古記錄等を棄てて反古とし、燒いて灰として少しも顧るもののない時に本書の上木は近世村落史料並に庶民史料保存に對する警鐘と云ふべきである。

本書に收錄のものは天正以來明治初年に亘る同村の生活資料で、就中、同村に於ける用水の水車利用と其の季節による封印、出入に關する多數の文書は近年毎歳問題となる電氣動力の利用制限と思い合せて頗る興味を抱き、また浪華と近接のため商品作物として棉花の栽培のあつたことをも知るなど經濟史研究者にも亦必讀の資料であることは記す迄もない。

終りにかく貴重の資料の蒐集に努力の編者に敬意を表し、既に脱稿の本論「河内石川村の研究」の印行を待望し、更にかくも多數の資料を今日までよくも保存愛藏された石川村民の愛郷心並に上梓に當り費用を吝まず、本書を學界に贈つた竹綱村長始め有志各位の理解に編者の學友の一人として、敬謝の意を表するものである。

（昭和二七年六月二〇日、清水市東海大學文學部研究室にて、武田勝藏）

世界史における日本（G・B・サンソム著　大窪愿二譯）

一昨（一九五〇）年十二月、著者サー・ジョージ・サンソム氏は東京大學に招かれて、同月上、中旬にかけ、五回にわたる連續公開講義を行つた。題して "Japan in World History" という。本書は主としてその講義草稿に若干筆を加えて出版されたも

のの譯文から成る。それに附錄二編（一九四八年六月に書かれた「日本の致命的失策――太平洋戰爭の批判――」及び一九五一年三月發表された右の訪日の折の印象記「日本の精神狀況――一九五一年末の印象――」）と、矢內原忠雄氏の序、譯者の解說「著者について」等を添えて一本としたものである。

したがつて、その意味でこれは決して學究的な專門書とはいえないし、そこに必ずしも新しい成果を期待することも出來ない。もしもそれを求めようとするならば、同氏の最近の勞作「西歐世界と日本」"The Western World and Japan. London and New York, 1950." によるべきであろう。本書はこの大著への入門書といつてよいと譯者もことわつている。しかし、ここにもその論點の若干は盛られ、さらに一つの示唆がある。日本史を研究する上の一つの態度――それはそれなりに疑問もあろうけれど、とにかくそうした立場の一つが提示されているのだ。それは「人間社會のすべてをひつくるめた歷史」における日本史の地位とか、役割とかいつたものを他の國々の歷史との比較研究によつて究明し、「日本史の過程のなかから、いくつかの特徵、いくつかの傾向を、そこに在るものまたはないものを、何が特殊的で何が一般的であるかを、國民的でなく普遍的な、言つてみれば世界的なものを一探しだそうとするものである。そして、このような比較研究においてこそ、西洋の研究者等が、外國人であるための多くの制約を充分承知の上でなお、日本の學者等の研究活動に或る種の有益な寄與をなし得るのではないかといつて、非常に謙虛ではあるが極めて眞摯な態度で、それが正しく達成されるための協力を、著者は切に要望している。

日本はただに地理的位置からみただけでも概ね諸外國から隔絕し、ながいことそれらとの交涉を缺き、それらの影響を免れてきた。そのため稍もすれば日本の孤立ということが誇張され、日本の歷史は近代にいたるまで世界の他の國々の歷史とはあまり連絡もなければ關係もうすかつたように思われがちだが、むしろ「日本民族の歷史は人間社會の總和の歷史にとつて重要な一部分ではあるまいか」。人間社會の發展をあとづけるのに獨り日本のそれが例外であるわけはなく、また當然それを無視も出來まい。これが日本史が世界史の重要な一部として取扱われるべきだと主張される所以であつて、ここにいう「世界史」の概念とは卽ち前記のような意味を持つものなのである。だから、この場合の日本史研究は日本史それ自體に目的があるのではなく、つまり「孤立的に生起する諸事件の單なる記錄としてでなしに世界史の有機的なかつ重要な一部として」、研究されねばならぬという。そういう歷史が「小さな歷史」La petite histoire をさし、ごく「ありふれた人間集團なり社會なりにあつて歷史を形成する原料を作るような人々が生きている、またはこれまで生きて來た日常生活のこと」を

扱うのはもとよりであろう。そこで、かかる研究事例として近世史の上にこんな試論があげられる。

一つは經濟史上の問題、他は思想史上の問題で、かりにいま前者について概要すれば、維新前における日本の農業の歴史にみられる農村の疲弊、農民の困窮は封建爲政者の抑壓と密接に關連するから、要するに封建政治そのものに根因があると、よくそう考えられるようだが、こうした結論を下す前にわれわれは問題をもつと廣い背景のなかで愼重に取扱うことが妥當なのではあるまいか、世界の他の國々の歴史における農村の狀態との比較は果してどうなのか、といつた具合で、ここでは特に同じ島國でもあり一般に日本と類似の多そうに思われるイギリスが對象に選ばれている。當時農業勞働者の狀態が貧しくかつ慘めであつたのはイギリスでもやはり然りであつたのである。ところが、日本ではそれがためしばしば飢饉と疫病に惱まされ、國が荒廢し政府は困却に追いやられたのに、イギリスでは人口の增加にも拘わらず案外事なく食糧問題を解決してきた。この相違の因由は兩國の事情を注意深く入念に比較檢討するならば、なにも政治制度にあるのではなく、イギリスには一、可耕地が相當に大きかつたこと、二、すでに大工業がおこつて海洋貿易が行われていたこと、三、經營の多樣化により農業が大分改善されたこと等の有利な要因があつたのだ。日本はたとえいかなる政府が支配していたにしても、あの時代かかる困難にうち克つことは恐らくむずかしかつたろう。それは日本の封建政治構造のためではなく、米が唯一の主要な作物である集約的な小規模米穀生產という傳統的な組織のためなのであつたと、こう論斷する。このように比較方法を用い、日本史を世界史との相關關係において檢討し、何が基本的で何が偶然的であるか、何が「典型的」で何が「特殊的」であるかを考究、一般的なものを特徴的に日本的なものから區別しようというのである。

思うに、こうした比較は或いはこれまでにも全くなかつたとはいえないかも知れないが、意識的に進んでそのような態度を主張するのは新しい試みで、それが視野の廣さにはたしかに學ぶべき節も多い。思想史の問題の場合といえども、それは同斷である。ただ、歴史は常に與えられた條件の上に發展して行くものであり、しかも同條件というものは世界を通じ唯一に限られる。時と處を異にしてそれらを同じく具備することは不可能である。そうすると、いくつかのそれらの條件を比較する場合、どこに焦點を合わせるか、その比重がかなり問題になるだろう。それらの異なつた諸要素のうちから、どれが一體眞に歴史現象を左右した要因であるかを、いかに檢出するかは決して容易なわざではあるまい。うつかりすると、意外な誤謬を冒す危險が少なからずそこにひそむものといわねばならぬ。最も留意すべき點として結論のむずかしさがしのばれる。著者があくまで謙虛に日本の學者等の協

力を懇望し、また緊急な基礎的仕事の一つとして日本語の重要な史料の翻譯をあげているわけも、いわばそこにあるといえよう。それを正しく導くためにはわれわれ日本人側も決して協力を惜しんではなるまい。

とにかく、十三世紀末マルコ・ポーロの紹介以來、西歐人の日本研究も淺いことではない。降つて一八五二年、ペルリ提督の日本渡航にあたつて豫め渉獵した日本關係圖書は數十册に上るといわれ、今日それがここにまで至つた。わけても戰後の隆昌は格段の感があり、米國などにはこのための特殊研究機關の設置も間々みられ、研究を志して自ら、或いは派遣されて來日する人々もしばしばある。著者サンソム氏の長たるコロムビア大學極東研究所 The East Asia Institute もその代表的な一つといえる。かつては、いわゆる異國情緒に對する單なる趣味的關心とか、せいぜい政治的經濟的要望に基ずく關心に止まつたとも思われる外國人の日本研究も、いまやこうして狹義の國內史としてでなく、人間社會全體の歷史の一部として位置づけようとするまでにすすんできたわけである。その成否はしばらく別としても、こういう實證主義的な比較史の上での努力は大いにかわれていいと思う。

それから附錄の二編はまだ歷史の對象としては日が淺すぎて、史實の究明というより論評の域を脫し得ないが、歷史もこうなつてくると、到底個人の書齋だけでは埒があくまい、いよいよ綜合研究の意義と重要さとが痛感される。

（岩波新書、一五八頁）（會田倉吉）

福岡縣糸島郡一貴山村銚子塚古墳研究

日本考古學協會古墳調査特別委員會

魏志倭人傳に記された伊都國の故地と信ぜられる糸島郡の一貴山村に於て、古墳の學術的調査が昨春初めて行われたことは、我々の關心をひくものが大であつたが、こゝに早くも報告書が刊行され、注目すべき成果の全貌に接し得たことを先づ感謝したい。この調査は日本考古學協會古墳調査特別委員會により、小林行雄氏を主査として實施されたのであるが、期待に背かぬ成果を擧げ、いわゆる邪馬臺國の位置に關する重要な示唆がなされた點に於て、特に重大な意義がある。本書の構成は、

前篇
第一章　序說
第二章　古墳の位置と現狀
第三章　石室の構造
第四章　遺物の配列
第五章　遺物各說
後篇